

2021年12月号

中村和弘

<巻き癖>

天空の鷗の声も浦祭  
満月に鱗めきたる松の幹  
巻き癖の紙もて余す十三夜  
象紙のやや膨らみて良夜かな

象紙=象の糞で作られた紙

昆虫のどれも枯れ色枯野かな  
長城の壁に吊して胡麻を干す  
汐木みな骨のごとくに冬日かな

-----  
大石雄鬼

<牛の皮>

黒鳥に触れたるやうに秋めける  
蜻蛉の目がさがさとしてふと青空  
牛の皮大きく縊れて山粧ふ  
心臓のまぢかにせまり蘭の花  
十六夜の心にこぼれくる小鳥  
鯨飛んで背中は窓をあけてゐる  
暮の秋マッチの軸のよわよわし

-----  
陸・この20句中村和弘選

十五夜の足のきれいな谷の中	大石雄鬼
卓袱台の脚に朱を射る秋朝日	稲村茂樹
映写機に匂いのあれば秋の雨	瀬間陽子
火を燃せば煮凝り家のなまぐさき	吉本のぶこ
踏み跡のほつそりとある秋彼岸	佐藤禎子
窓開けて虫の子放つ夕月夜	小竹ヒサ子

震災忌テールランプの赤さかな	上田桜
庭に聞く犬の足音良夜かな	小川葉子
雑木一樹覆いつくして葛の花	荒堀かおる
梨ひかるのつぺらぼうの雲の水	佐々木貴子
ほうほうと撫でて拍ちけり大南瓜	藤川夕海
過去といふ宝物ある良夜かな	河重卓三
滅反地筆りて遊ぶ穂草かな	小保方京司
砂時計の砂子のきらら天の川	小川七穂
九月尽歸りたがらぬ犬と雲	森井美恵子
白神の源水透きし新豆腐	田中三桃
無花果の枝に登りて誰を待つ	駒木みどり
秋あかね賽の河原の石の塔	荒川昌子
日光の神域に立つ秋気かな	池崎昌子
秋うらら百葉箱の白さかな	白鳥青羽

---

2021年11月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表わす場合があります。

---

中村和弘

<百穴>

暗礁も貌を出したり秋澄めり  
草莽の一叢あれば虫時雨  
噴火口ぐるりと錆びて晩夏かな  
手のみ見え菊人形の髪を梳く  
百穴の墳墓を入れて紅葉山  
霜月の棘の威をます枝のあり  
地下道を窮鼠の走り聖夜かな  
甲斐犬の荒毛逆立ち獵期くる

---

大石雄鬼

<後輪>

強く強く首のまはりの秋螢  
鬼灯に触れしてのひらよりあくび  
天高し袋のやうな魚釣る  
塩辛蜻蛉朝日の透けてうごかざる  
後頭部のごろごろとせし鮭風  
十六夜の目高は底に沈みけり  
後輪のもたもたとして曼殊沙華

---

陸・この20句中村和弘選

縄文の冥い火炉跡梅雨兆す	稲村茂樹
口紅を濃く差す蛇に遭ひしあと	浅沼真規子
紺碧という風鈴の音ならん	吉本のぶこ
菊たべてしばらく来ない鳥おもう	瀬間陽子
水無月の木蔭に赤き多喜二の碑	山本高分子

土石流一村呑みてカンナ咲く	石川真木子
炎昼の樹々白光す死の多き	小竹ヒサ子
金箔のゆらゆらとして処暑の町	上田桜
空蟬の昇殿のよう石燈籠	小川葉子
塵芥は子蛙なりき秋めける	米川五山子
吾が声の何処より百足虫殺めたり	荒堀かおる
梅干して首の手拭しめ直す	鎌田史子

吉見百穴にて

落雷の百穴闇をひとつずつ	及川明子
朝日射す木の上ばかり木槿咲く	森池義子
部屋内を覗きこむごと蟬鳴ける	田中七子
向日葵を倒す豪雨や海暮るる	別所弘子
半分に切るも恐ろし大西瓜	根岸三恵子
ががんぼの触るるともなく壁づたひ	安住正子
走馬灯オリンピックの後の闇	小村寿子
散髪の鏡をよぎる夏帽子	中嶋和臣

2021年10月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表わす場合があります。

-----  
中村和弘

<絶巖>

夏蝶を腐木が放ち寂(しず)かなり  
鯉節つよく匂いて土用なり  
未成り西瓜自ずと裂けて鶏が食む  
かなかなや堆積の土砂眼下にす  
片耳を鬼の垂らす大暑かな  
芒野に鶏舎一棟埋れおり  
夕焼に亡き白壁の染りおり  
水恐る河馬の子映し水澄めり  
盆灯籠影にも淡き彩のあり  
絶巖は胸中に見え天高し

-----  
大石雄鬼

<姿>

平手打ちされたるやうに蓮咲けり  
蟬の木の姿は天にまかせたり  
宝に手つつこむやうに昼寝する  
水澄んでぼこぼこになる朝日かな  
巨匠いつまでも座るや秋の鮎  
背骨曲げて竜胆をのぞきみる  
十五夜の足のきれいな谷の中

-----  
陸・この20句中村和弘選

壁をこえ国境を越え夏の草	森井美恵子
踊子草たちまち牛の腹のなか	小菅白藤
寮室や虹見る為の窓一つ	杉山鮎水
学び舎に農園ありし麦の秋	荒堀かおる
舟虫の群れて網縫ふ漁夫の足	牧ひろし

日焼して筋金入りの丸太ん棒	渡部洋一
試歩の朝ドアに白蛾の銀の粉	岩沢みえ
紫陽花の顔廃永き土を舐む	佐々木貴子
立枯れの木の崩れ伏す梅雨晴間	石堂つね子
掌に受くる滴りといふ研かな	河重卓三
違ふ違ふあの手のはりは蠚ぞ	北原千枝
象潟の如し植田の居具根かな	高橋仁
万緑へ飛び込んで行く電車かな	桜田花音
大雪溪幣(みてぐら)として白馬嶺	伊藤岳栄
夏雲のアルパカとゆく最上川	阿部雅子
青梅雨や日暮の森はモンスター	佐々木玉枝
花槐散るスカラ座の広場かな	根岸三恵子
不快指数高きその夜蛍飛ぶ	長谷川佐知子
衣更ふ少女につつと小さき角	小田桐妙女
裸子や海より来たる者の裔	松本清美

2021年9月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表わす場合があります。

---

中村和弘

< 蛍の光 >

初夏の仔鹿に白きはだらかな  
ものの影おどろおどろに熱帯夜  
ふらふらと揚りて消えし花火かな  
デジタルの蛍の光り熱帯夜  
熱帯の荒野の生れカンナ燃ゆ

インドネシア

大蝙蝠の目の赫々と花粉降る  
荒壁に馬の貌出て夏祭  
鯉節つよくにおいて土用なり  
牡鹿の跳躍しつつ芒原

らばはら

溶岩原に花の色濃き薊かな  
水槽の鯰が笑う厄日かな  
雷雲に赤い造花の靡きおり

---

大石雄鬼

< 壁 >

白壁に凭れて虹が見えて来る  
業平忌老眼鏡のゆるくあり  
革財布の傷のしづめば山青し  
食パンのだらだらとせし川鶉来る  
ひとりだけ怒れば梨の芯いたむ  
覆面をうらがへし脱ぐ黍嵐  
壁ばかりの街に生れて桃を剥く

---

陸・この20句中村和弘選

耳にロック茄子に山椒の味噌を塗る	岩崎嘉子
人は皆人になびきし冷夏かな	吉本のぶこ
亡きひとに体当たりして踊りかな	瀬間陽子
終に絶ゆトロイのポピー赤惜しむ	山本高分子
紫陽花の彩づく速さ人逝きし	小竹ヒサ子
アカシアの匂いかぶさる養魚場	十亀カツ子
漏刻の尽きることなき大暑かな	上田桜
青嶺へと真向ふ朝の通学路	大野和加子
その屑の星となりたる大花火	牧ひろし
春霖や毀つ思案の古倉庫	田中眞青
恐れより始まるキャベツ渦の朝	佐々木貴子
蜘蛛と居て民話のような赤い月	西牟田ふみ子
生き物が柴折る音か夏の山	多摩川州
駈けて来る花梔子の雨上がり	藤川夕海
古書店の窓の闇濃し桜桃忌	古川章雨
青胡桃熟れゆく夜なりよく眠る	山田和歌子
草ごとに持ち上がりをる蟻の塚	松川和子
梅雨しきり糶場食堂映画めく	松本清美
秩序なき待合室の熱帯魚	池崎昌子
遠花火海岸線の浮き上がり	中嶋祥江



2021年8月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表わす場合があります。

---

中村和弘

<太刀魚>

紫陽花の毬毬りつつ下校の子  
太刀魚に虹色走り釣られけり  
落角に苔の花咲く熊野かな  
毬(う)つ足も蹴る足も秘めあめんぼう  
土石流の削りし跡の大暑かな  
泥土の堆くして大暑かな  
生涯を擬態せしまま鱗死す  
水中の人体白し暑氣中り  
ハンカチは水分として涙吸う  
土と水しばし馴染まず原爆忌

---

大石雄鬼

<闇の硬さ>

漢字帳よりはらはらと羽蟻かな  
かたつむりの胸のひろがる浄妙寺  
金魚玉にこつそり街が映りこむ  
洗濯機よりさびしくて夏の鴨  
てのひらの葉のやうな大昼寝  
枕には闇の硬さよダリア咲く  
山降りて胸のふやけてゐる八月

---

陸・この20句中村和弘選

素転んで梅雨の走りの白い空	稲村茂樹
修司忌のマリオネットを月に吊る	大類つとむ
あなたの目に映る私夏は来ぬ	中村彷徨
母の日に根やら草やらふきだまる	瀬間陽子

流木はティラノサウルス夏の沼	大野和加子
鬱の字面ただものならずさくらんぼ	米川五山子
朝焼や赤き半島指呼にあり	牧ひろし
若葉風散髪終へし神馬なり	古閑容子
親亀の目蓋重たし霾ぐもり	西牟田ふみ子
囀の中に我あり無き如し	多摩川州
眼のふちに命の蜘蛛の糸残る	徳竹三三男
明王の牡丹吐きだす月夜かな	猪狩鳳保
コロナ禍や武者人形の目が泳ぐ	松浦廣江
縫い針に電光走る大夕立	小林千香子
菜種刈る音里山に響きけり	根岸三恵子
放られて座りよかりき早苗束	松川和子
囀りや聖の座る穴浅し	土岐詳恵
しやぼん玉ため息空へ連れ去りぬ	桜田花音
二兆個の銀河の中に咲く桜	清水山梳子
いつぺんの花びら石をあたためる	小田桐妙女
初夏や地平線まで土黒し	小村寿子

2021年7月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表わす場合があります。

---

中村和弘

たたら

<踏鞠踏む>

藁苞に野鯉を寝かせ端午の日  
ダム底に川筋現るる早梅雨  
重げに白鷺翔ちて梅雨に入る  
川舟の泥にはまりて早梅雨  
種豚の柵に突進夏立てり  
大鐘を撞けば守宮の落ちてきし  
踏鞠踏む馬を先立て在祭  
少年の家鴨を放つ青田かな  
夏場所の鬢付け油匂いたつ  
磧にも壘にも澱が麦の秋

---

大石雄鬼

<人沈む>

胸に蝶つぶれてみたり修司の忌  
背は海苔のごとくに街を歩いてゐる  
浴槽のしづまり八十八夜かな  
夕焼の華やぎながら人沈む  
軍艦の咳つぼく梅雨空にゐる  
夢よりもきれいな胸とかたつむり  
首筋のごときが見えて泉湧く

---

陸・この20句中村和弘選

亀鳴くや暗証番号宙に在り

浅沼真規子

ネオン街の底の首塚夜のさくら	岩崎嘉子
閉経を春のくじらのよこぎれり	瀬間陽子
船の荷の積木のごとし春疾風	大野和加子
納骨行陽炎に機首上げて発つ	今田克
ほのぼのと殞日和や花の雨	佐々木貴子
潮騒に三・一一の読経なり	古閑容子
福島の第一走者青き踏む	多摩川州
ポイントが溜まつて春の雲に乗る	小保方京司
防空壕そばのプレハブ卒園す	前塚かいち
三月の街ブーメランのような風がとび	吉見弘子
緩慢な鯉に向かひて亀の鳴く	宇佐川うさこ
初蝶のトーテムポール越えゆけり	根岸三恵子
うぶ声のこだましてをり春の虹	土岐詳恵
蔦若葉夕焼色の壁を這う	駒木みどり
しやぼんだま落暉の海へ顔向けて	森井美恵子
春風や麒麟は睫毛震わせり	伊藤岳栄
オンライン世界に春のARIAかな	塩坂泰子
松の花陽の高ければ犬転ぶ	吉川孝子
テーブルのナイフ曲げるや春の雷	加藤浩二

2021年6月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表わす場合があります。

---

中村和弘

<墳丘>

墳丘は巨木を生し端午かな  
戦禍の馬炎えつつ馳せる夏の夢  
河原にも澱のたまりて麦の秋  
蟹穴に靄のごときが走り梅雨  
潮目には芥連り夏に入る  
石人のどれも兵士よ麦の秋  
ぼうたんの国家のごとく衰えし  
山頂の砦は崩れ麦の秋  
麦秋の貨車より馬の躍り出る  
長江を跨いでゆくかあめんぼう

---

大石雄鬼

<濁り>

後頭部の崩れしやうに桜咲く  
ささみ肉の筋切る春満月の下  
人間の重さであるく啄木忌  
春雷や猫が地べたのやうになる  
人体をすこし畳めば穀雨かな  
心臓は闇につつまれ荷風の忌  
蛍光灯の濁りが照らし武者人形

---

陸・この20句中村和弘選

日の暈をそびらに雪の雷鳥よ 岩崎嘉子  
まつくらな叡山いかずちを飼うごとし 吉本のぶこ  
悼 克婦幸子他界  
ただならぬ春の大虹渡しけり 今田述  
鉛筆削るわれは少年初蝶来 米川五山子

視力表くつきりと見えあたたかし 堀尚子

パン

むらさきに靄ふ春空牧神の笛 今田克

すさまじき雪折れの中通勤す 大類準一

針山に待ち針を足す春近し 荒堀かおる

青信号どつとマスクの寄せて来る 富田栄子

実朝忌空とぶスキーの着地前 高橋時子

LEDの光容赦なく恋の猫 及川明子

雪解水恐ろしきほど檻の中 木村詩織

春雨や誘導灯を円く振り 藤川夕海

アイガールの壁に穴ありおぼろ月 猪狩鳳保

カンカンと春の遮断機一両車 平恵

東風吹くや厩の窓に馬の貌 伊藤岳栄

一本のぜんまいとなり昏睡す 朴美代子

田植機の見事な捌き見て歌う 丸山健一

浅春や「UFO島」へ鳥翔てり 安住正子

春めきてうたた寝に老い力つく 平田正枝

2021年5月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

---

中村和弘

<夢の島>

象亀（ゾウガメ）の皺太太と桜かな  
大鯉の屍を容れて花筏  
火口湖の青き円盤鶴帰る  
夢の島浅蜷の死臭混りおり  
石垣の蛇の穴まで花筏  
雀の巢吹きあげ熱帯低気圧  
不良少年しばし輝き柿若葉  
乳牛の乳房にとまり春の蠅  
流離いのガンマン斃れ目借時  
恋猫に羊の群の近付かず

---

大石雄鬼

<実験棟>

まなうらにこつんとあたる蜃気楼  
痒みまだ目玉にのこり抱卵期  
人体にかけ春コートふらふらす  
鍋敷きは草原となり四月来る  
陽炎の中こんこんと記憶なくす  
背は海苔のごとくに街を歩いてゐる  
春夕焼は実験棟の奥にある

---

陸誌から中村和弘の選ぶ20句

白鳥の剥製を置き駅寒し 浅沼眞規子  
よろめきの刹那大綿へ手を伸ばす 岩崎嘉子

石山寺の石の繚乱霞む野辺	吉本のぶこ
綿虫や杉の葉を搗く大水車	十亀カツ子
火葬場の裏手の堤野火走る	上田桜
前線の在り処見えたり冬の雷	堀尚子
乗り継いで兎の島へ春の旅	浪本恵子
人体模型の潜む教室余寒かな	牧ひろし
受験子の窓かとおもふ大氷柱	大類準一
雪の花曼荼羅絵図に広がれり	鎌田史子
糸柳揺らす灯映す高瀬川	今田克
マスクしてみな眼力の強くなり	大瀬響史
曙光や氷の窓のさんざめく	佐々木貴子
スマホから小鬼飛び出し鬼やらい	西牟田ふみ子
裸電球金並銀波の白魚汁	猪狩鳳保
春の猫眠りの真中耳立てる	中村穂
島よりのサーチライトや風冴ゆる	根岸美恵子
笛吹川二月の水の発光す	雨宮和彦
カレル橋仕置場ありてミモザ咲く	吉川孝子
花菜風鴉滑空繰り返す	藤倉頼江



2021年4月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

---

中村和弘

<霾天>

氷る日の造形論を畏れけり  
フクシマの氷の声に耳澄ます  
幻氷にゴマフアザラシ眠れるか  
一天に猿声湧きし芽吹谷  
五郎太石みな若鮎を迎えおり  
モンゴルの包(パオ)吹飛ばし黄砂くる  
竹林に黄砂降る音ひびきおり  
汚染土の黒き袋に黄砂染む  
徴用の軍馬の塚に黄砂降る  
大岩に鶺鴒の集りて霾れり  
玄室の飛鳥女人によなぼこり  
万葉の耀歌の岡も霾れり  
万卷の経典埋め胡沙嵐  
長城の駱駝怯えし胡沙嵐  
霾天に黄山さらに幽かなり  
霾天に聳え立ちたる摩崖仏  
神(かみさ)むは狼の声霾れり

---

大石雄鬼

<後姿>

綾取りの向かうの山が欠けてゐる  
後姿のかたむくやうに草萌ゆる  
スウェーデン語のやうな日永に足伸ばす  
癌検診大きなかほの虻あるく  
春日射し目高のなかで黒くあり  
赤黄男忌の崖しをらしくありにけり  
ハンガーからハンガー下がり穀雨かな

-----  
陸誌から中村和弘の選ぶ 20 句

挑戦とは心の翳り十二月 稲村茂樹  
弱震や狐火屋根を伝ひゆく 浅沼真規子  
元日やよそよそしきは部屋の中 永井アイ子  
陽炎を反芻したる牛の舌 吉本のぶこ  
(姓の「吉」の上の画は、下が長い「土」)  
枇杷の花冷たい顔のまま眠る 瀬間陽子  
鱈パック白子の花の咲いており 石川真木子  
厳寒の長春ひとり馳けていた 竹内實昭  
寒晴や機械仕掛けの鐘を聴く 佐藤禎子  
火襦の雲の彩り初浅間 今田克  
雪原となる公園のジャングルジム 大泉秀明  
隙間風物言ふ口に絡み来る 徳竹三三男  
石の声聴こえる石工竜の玉 及川明子  
語部の座る毛皮の穴一つ 小保方京司  
誰が決めし万物の色雪の白 桜田花音  
寒暮色ガラスの中の美容室 森井美恵子  
大櫓のぐらつと傾ぐ藻塩釜 根岸三恵子  
雪うさぎ解けてだんだんうずくまる 森池義子  
雪野原大きな鳥の羽拾ふ 松本清美  
鰯起し能登の泊りを震はする 安住正子  
観音の丘方円の初明り 藤倉頼江

2021年3月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

---

中村和弘

<ものの種>

初風の地球死にしほど長し  
軍鶏の鶏冠ちぎれて春立ちぬ  
春水の一滴に揺れものの種  
富山湾の底に溢れて雪解川  
海藻は気泡にまみれ春立ちぬ  
マグマ溜の上かもしれず緋桃咲く  
人にコロナ鶏にインフル日永し

---

大石雄鬼

<しがみつく>

カウンターの高きところで日記買ふ  
ふるさとに眠りに帰るオリオン座  
冬眠の山にしつかりしがみつく  
和菓子とはべたつくものや山眠る  
山頂を眼の奥に入れ弓始  
老眼のまぶたの厚し歌留多取り  
水底はひよこのごとし水温む

---

陸誌から中村和弘の選ぶ20句

冬樹から伝はる脈のごときもの	浅沼真規子
頭の大き蛇を華とす豊かな	吉本のぶこ
カラヤンのように焚火を了らせる	瀬間陽子
芋虫の大目玉去り緑の橋	小川葉子

柿熟れて空に残れる能登瓦	大野和加子
切株に斧を嚙ませて山眠る	渡部洋一
冬晴や爆音のなき一機かな	牧ひろし
一晚の雪に十字架埋もれけり	大類準一
大仏の目から人出て大掃除	小林政女
朝の市つぎつぎにつむ雪の箱	佐々木貴子
欠伸して心のどこか寒くなる	大泉秀明
銅鐸やしじま深める隙間風	徳竹三三男
裏山を横に降りゆくしぐれかな	温井幸子
ひとり住み冬木のごとく一人言	田中七子
過疎の村皇帝ダリアそそり立つ	西村敏子
発電所の蒸気しぐれの海に消ゆ	藤倉頼江
発熱に驚きやすき白鳥来	石井節子
糶売りの牛の踏みたる今朝の霜	加藤浩二
船頭の唄がふるはす白障子	安住正子
蜂の巣の球体曝す冬日かな	内海新

2021年2月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

---

中村和弘

<大甕>

大甕に水の溢れし淑気かな  
風神の大きな臍も淑気なり  
初風の湖底に見えし鳥居かな  
内臓を吐きて海鼠の上がり来る  
泥砂を微かに残し海鼠死す  
寒海鼠拝み両端切り落す  
土竜出て花正月に轆かれおり

---

大石雄鬼

<顔>

ふと山のごとく臭鼻眼をひらく  
冬蜂の玉になりかけ海光る  
白菜のきらめき客員教授かな  
頬骨は枯木ノートルダム寺院  
白鳥のしづかに汚る賀正かな  
初買の顔が平らになつてゐる  
福笑かたづけしあとすぐ眠る

---

陸誌から中村和弘の選ぶ20句

大農場の隅に家ある豊の秋	富山孝道
目の上をゆく鮫の腹石柱めく	加藤明虫
鳶舞う志々満(ししま)が原の新松子	十亀カツ子
木の実降る小さな国の大使館	渡部洋一
木枯や湖くろぐろと野犬吠ゆ	牧ひろし
うぶすなの祠耀く蕪柑子	岩沢みえ

冬の星軋ませてをり大水車 大野和加子  
風が強いね月も洋梨も溶けた 佐々木貴子

糸粒体（ミトコンドリア）の分裂融合星月夜 石堂つね子  
電球の揺れて哀しき三の酉 河重卓三  
すさまじや銭洗ふ水銭の色 猪狩風保  
戦争を擬音まへて長き夜 北原千枝  
混迷の世を高く抜け木守柿 田中七子  
迷ひびと多き冬なり赤き星 別所弘子  
長靴の重き二人や末枯れる 松浦廣江  
夕闇の青くて夜長始まりぬ 清水山稜子  
親鸞像の杖に草鞋に小鳥来る 安住正子  
秋の夜の液晶点る書齋かな 白鳥青羽  
枯草に赤の浮き立つ雉番 内海 新  
どんぐりの小さき穴を見つめる子 小橋めぐみ

---

2021年1月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ（ ）で表しました。

---

中村和弘

<春情>

コロナ禍も煩惱なりし冬桜  
片角の大鹿走る時雨かな  
寒鰯の舟底を咬む気配かな  
軍手みな氷柱を生みて飯場なり  
船腹の塗装のにおう神無月  
ラッパのごとき象のひと声年つまる  
赤赤と奴の貌を飾り凧  
海猫の春情めきし声かとも

---

大石雄鬼

<光の街>

七五三光の穴の落ちてみし  
心臓のちかく兎を眠らせる  
氷柱からそろり流れる天使かな  
極月や光の街のいたむところ  
建物に筋肉つきし冬の月  
部屋に影あふれて冬の正露丸  
極月や原つばのやうに腰痛む

---

陸誌から中村和弘の選ぶ 20 句

発光体となりし漁港よ初さんま 岩崎嘉子  
暗緑色引き摺るお化け南瓜かな 加藤明虫  
あらあらと鹿をおしのけ母は来る 瀬間陽子  
ひとところ足跡深き苺田かな 富田栄子  
葬列の順読み上ぐる秋の天 大類純一  
真鯛や七つの海の星を持ち 大瀬響史  
星雲が星を飲み込む南洲忌 多摩川州  
干し物の下を潜りて小鳥来る 徳竹三三男  
廃棄物じつと見てゐる野菊かな 河重卓三  
たらちねの声の際立つ月の酒 三浦星津女  
高窓に月を見る日の詩仙洞 森池義子  
昼の虫破船に一つゴム草履 小川七穂  
コロンブスの卵こつんと文化の日 桜田花音  
指のあと桃に原罪ありにけり 土岐祥恵  
夜の闇落ち椎のふと金属音 保坂純子  
馬面の祖父瓢箪を磨きをり 山田和歌子  
楹椀に迷路めきたる虫の跡 松川和子  
喪の欄にその人がいて初冠雪 平 恵  
木枯や鬼監督を避け通る 長谷川佐知子  
みくまりの水の勢ひや芋車 安住正子